

戦争の時期、母は佐世保の近くの離島の小学生でした。

島の小学校は、若くて生徒達に慕われる先生が担任で、毎日楽しくまだ平和でした。

しかし、戦争は激しくなり、とうとうその担任の先生も兵隊に取られて、遠い戦地へ行く事になり、出発する先生をみんなで元気にバンザイをして見送りました。

それでも先生がいなくなって、さびしい気持ちがあったのは当たり前です。

ある日、佐世保の港から続々と海軍の船が出発して、沖に向かっていくのに誰かが気づき「先生が乗っているかも!」と子供達はみんなで丘の上に向け登りました。高い場所から沖の方を見ると、水平線が見えない程ずらりと並んだ海軍の船が進んでいて、佐世保港からの船も合流して、沖の彼方へ消えて行きました。

その光景に、子供だけでなく集まってきた大人達も「あんなすごい数の軍艦がいるんだ、日本はやはり戦争に負けるはずがない」と言ったり、思ったりしました。日本が勝って、先生も帰って来ると信じていました。

戦後、正しい情報を知ることが出来て考えてみると、あれは南方、ミッドウェー島におかう船団だったのでなかったのかと思いました。

担任の先生は戦死され、帰って来る事はありませんでした。

もしや、あの沖へ進む無数の船のどれかに自分達を可愛がり教えてくれた先生が乗っていたかも知れない、まだ 20 代で命を落とさなければならなかった先生の事。

「あのころはね、お国がする事は全部正しいと信じていたけど、遠い海の向こうで帰りたくても帰れなかった人が、どれだけの数いたのかと思うと、未だに悲しくなる」

私が高校生のあるころ、一度だけ母が話してくれた戦争の話です。